

～父性、母性のこと～
＜親と子の絆を深める道程
広木克行著＞

- ◎ 「怒る」ということと「叱る」ということの違いを
子どもは感じ分けています。
「怒る」というのは
「頭に来た。許せない」という親の感情の爆発です。
その気持ち子どもに通じる保障はありません。
「叱る」というのは、
子どもがやったことの何が悪いかを、
きちんと子どもに伝える。
その上で相応の罰を与えることです。



～心を育てるということ～

- ◎ 今、多くの子どもたちが「愛してほしい」と願っています。
なぜ、子どもたちがこんなに愛に飢えているのでしょうか。
それはありのままの自分ではなくて、
あるべき自分がないと受け入れてもらえない
と感じながら、育てられていることを示しています。
将来、子どもが何か悪い道に引き込まれるようになった時、
または死にたいほどつらさにおそわれたりした時に、
親の顔を思い出して
自分にブレーキをかけることができたこと
言ってもらえるような親になりたてたいものだと思います。

- ◎ 愛されている美感が持たず、
親から見捨てられるかもしれない不安を
心で感じている子どもたちは、
「よい子」を演じるか、
他人を傷つける行為をするかが多いのです。
保育士を独占に放さぬ子どもも見られますし、
失敗することをとても恐るながら、
親の側から離れられなくなる子どもの姿も見られます。
「私は生まれてきてよかったんだ」
「僕は、この家で必要とされているんだ」
という美感を持つようにするところが
愛を伝える子育ての基本です。
それが今日よりも難しくなっているように
思えてなりません。

- ◎ 幼い時から
知識をいっぱい教えていった方が、
子どもは賢くなるという人がいます。
それが本当だとすれば、
なぜ小学校は6歳から始まるのでしょうか。
子を知る親の気持ちも時として、
子どもを見る目を曇らせる原因になることがあります。
幼児期にはしかできない大切なことを
見えなくさせることがあるからです。
幼児期にこそ育つ感性の芽を摘み取ることをしないように
小学校が6歳から始まっているこの意味を
考える必要があります。